

続・瓜の歌：『梁塵秘抄』三七一番歌について

大木，桃子
筑紫女学園大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/19771>

出版情報：語文研究. 107, pp.36-44, 2009-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

続・瓜の歌

——『梁塵秘抄』三七一番歌について——

大 木 桃 子

はじめに

『語文研究』第百五号に、「瓜の歌——催馬楽『山城』と和歌——」と題する論文（以下拙稿とする）を載せた。平安時代の瓜を詠み込む和歌は、催馬楽「山城」を踏まえながらも、『拾遺和歌集』の藤原朝光と藤原国章の贈答歌（五五七・五五八）の影響を受け、瓜づくりの性格に「山城」にない好色者という点が付加されたということを述べた。又、瓜の贈答や瓜に歌を書き付けた日常詠は、朝光、小大君、馬内侍ら選子内親王のサロンを中心とした親交の中で育まれたであろうことも述べた。

さて、平安時代末期成立の今様集『梁塵秘抄』三七一番歌

には瓜が歌い込まれている。この今様に、催馬楽「山城」や朝光の歌の影響が現れているかどうかを検討するのが本稿の目的である。又、当該歌は前後の歌と何らかの繋がりを持つと見られ、三連章とする向きもある^{（注1）}。三首の関係についても考えたい。

一 『梁塵秘抄』三七一番歌と前後の歌に関する諸説

三七〇

清太が作りし刈鎌は 何しに研ぎけむ焼きけん 作り
けむ 捨てたうなんなるに 逢坂奈良坂不破の関 栗
駒山にて草もえ刈らぬに

三七一

清太が作りし御園生に 苦瓜甘瓜の熟れるかな 紅南あかた
瓜うり ちぢに枝させ生瓢なりのびせ ものな宣びそ薺茄子えんきなすひ

三七二

山城茄子は老いにけり 採らで久しくなりにけり 赤
らみたり さりとてそれをば捨つべきか 措いたれ措
いたれ種採らむ(注)

このうち三七二は、主として第三句(底本は「あこかみたり」)の読み方と解釈を巡り前二首に比べて早くから注目を集め、解釈が定まってきた感がある。(注)どの説を採っても、茄子は老いた女性の比喻であり、年甲斐もなく身籠った(或いはその可能性のある)女性をからかう歌となる。

三七〇と三七一の清太に関して、早く小西甚一が『梁塵秘抄考』で『雲州消息』(明衡往来)にも登場することを指摘しており、日本古典文学大系(岩波書店)、日本古典文学全集(小学館)、新編日本古典文学全集(同)にも引き継がれている。祭りで活躍していることから、芸人が取り仕切り役であったと見られるが、もちろん『梁塵秘抄』の清太と同一人物ではない。『梁塵秘抄』中には、月々清次(二七)、藤太巫女(三二四と四一四に重出)、侍藤五君(四〇六)、藤次(四四二)、など同様の名付け方をした人名が見える。早く折口信夫が、(注)何のことかわからぬが、藤太みこの藤太が出てきたよう

に、これが出てくるのは何かある。宗教関係のものだろうか。この頃の人の頭に印象的だったのか。清原の太郎か何か、誰かの通称みたいなものだろう。

と述べるのは妥当な見解である。上田設夫も三七〇の考察で、(注)「清太」という名は今日の太郎のごとき名前前で、当時においてなじみ深い名であったのだろう。雲州消息にもみえている。また次の371歌にもあらわれる。藤太、藤次、清吉(注)(清次であろう―筆者注) などとならんで用された。特定の一人を断定する必要はなからう。

とする。しかし、三七二の清太を神社に所属している下級の神職であると言い、一般農民と見られる三七一の清太とは別人とするのは考えすぎではなからうか。例え実在の人物であったとしても、歌の中ではもはや一般名である。『梁塵秘抄』によくある同じ歌い出しの替え歌、或いは一、二番と見るべきである。清太に扮した人物により、所作を伴って歌われた可能性もある。

一方、日本古典集成(新潮社)と新日本古典文学大系(岩波書店)は、清太が「平太(平清盛)」を連想させることから、三七〇・三七一を武士政権を揶揄した歌と見ている。集成は、鎌で草さえ刈ることができないのに僧兵や盗賊を鎮圧できるかと皮肉り、(平家一門に例えた)瓜類を列挙した上で、「茄

子なんぞ及びでないといひがんでみせた」と解釈する。三七〇の地名はいずれも交通の要衝であり、新大系は、逢坂が寺法師、奈良坂・栗駒山が奈良法師、不破の関が東国の武士勢を表すと注す。世相を素早く切り取った歌ということになり興味深い見解ではある。

三七〇・三七一は、文字どおり清太にしる「平太」と見なすにしる、三七二には茄子という言葉の縁でしか繋がらない。又、「平太」の場合、三七〇・三七一には武士政権の揶揄という共通項があるが、清太であれば、切れない鎌と瓜の列举に何らかの關係があるのか、ただ「清太もの」を二首並べただけなのか、充分に説明されていない。『梁塵秘抄』四句神歌の配列には明確な基準がなく、言葉の縁だけで次の歌に繋がるものが少なくない。三七〇がこの位置にあるのも、当時の女性風俗を歌った三六九番歌の最終句「長刀持たぬ尼ぞなき」が、同じ刃物の「刈鎌」を引き出したためと思われ、テーマ性による繋がりはない。だが、三七〇から三七二を、物尽くし歌謡や言葉の縁という以外の主題で括れないものであるうか。

その可能性の一つを示したのが渡邊昭五である。^(注6) これらを三連章とする渡邊は「当代ぎりぎりの卑猥な歌とみる」という見解を示す。三七〇の鎌を男性器の隠喩とし、地名の列挙

は男女が逢う意を掛けた「逢坂の関」に引かれてのものであらうと述べる。

清太の碌でもない鎌を研いで、女を求めて逢いに行つたとしても、草もよう刈れんワ…という調子であらう。

続く三七一も、その猥雑性を受けついで、農園の瓜や茄子は種々の女の隠喩とする。

(苦瓜・甘瓜・阿古陀瓜・瓢箪など)まともな瓜のたぐいならまだよいが、えぐ茄子(あくの強い茄子)は、論外で食べるにも食べられやしないね…といった笑いでしめくくる。瓜や茄子や胡瓜などは、木津川の流域に早くから朝鮮から歸化した人々によつて、栽培をされていたという。(中略)三七一の歌は歸化人の女の品評会といった男のひやかしの笑いも考えられるところである。

木津川流域の瓜づくりが歸化人だったということから、催馬楽「山城」を引き出し、それを三七二にも適用する。つまり山城茄子も歸化人の泥臭さを風刺したものと見なすのである。又、拙稿で取り上げた『拾遺和歌集』の贈答歌のうち、国章の「さだめなく…」を引き、これに、

歸化人の多い山城の狛地方への京都人の軽蔑が伝えられるように思える。

と述べる。

二 栗駒山について

渡邊説は「猥雑な歌の三連章」という大筋で肯定できるものの、瓜や茄子を帰化人の隠喩と見なしてよいものであろうか。又、三七〇の地名の列挙と三七一の瓜の列挙に何らかの関係があるのかも明らかでない。催馬楽「山城」との繋がり、別の観点からもう少し掘り下げたいものである。

三七〇の地名は位置関係が不統一であるし、逢坂と不破の関に比べ、他の二つの知名度が低い。奈良坂は都から大和への交通の要衝であり、他の二つの関と並べて不自然とまでは言えないが、栗駒山は都から近いものの、いささか均衡を欠くように思われる。渡邊もそうであるが、折口も栗駒山が出てくることに違和感を示している。これが歌の最後に置かれた意味を追究してみよう。

唐突なようだが、『大和物語』八十二段と百四十段を手掛かりにした。いずれにもこの地名を詠み込んだ和歌が出てくる。八十二段は前段に続く話で、季繩の少将の女・右近への気持ち冷めかけた権中納言敦忠が、ずっと使ってもせずに雉を贈ってきた。右近の返し。

栗駒の山に朝立つ雉よりもかりにはあはじと思ひしものを

この歌は、『古今和歌六帖』二「きじ」、『夫木和歌抄』二十「山」にも小異で載る。

百四十段も登場人物は異なるが類似の話である。元良親王と源昇の女との贈答歌二組が載る。最後の、昇女の返しにこの地名が詠み込まれる。

み狩する栗駒山の鹿よりもひとり寝る身ぞわびしかりける
同話が『元良親王御集』中に含まれ、栗駒山の歌は『夫木和歌抄』十二「鹿」にも「貫之家歌合、よみ人しらず」として採られている。

栗駒山は『歌枕名寄』によれば山城と陸奥にあり、八十二段とほぼ同じ歌が陸奥に入っているが、『大和物語』の栗駒山が、そんな遠方にあるとは考えられない。一四二段の「宇治へ狩をしになんいく」という元良親王の言葉からも、これらは「山城」でなければならぬ。当地は屏風絵に描かれ紅葉の名所であったことが知られるが、狩も行われていたのである。昇女の歌の「み狩する」は、序詞のように用いられてさえる。

さて、ここで『梁塵秘抄』に戻り、三七一の最終句に「えりらぬに」という表現が含まれることに注目したい。恐らく同じ音の「狩」を掛けて洒落ているのであろう。狩と言えは栗駒山。そして「こま」の音から山城の狛が導かれる。狛の

瓜づくりは内裏に献上するため、早瓜を作っていた。つまり御園生の瓜づくりである。鎌を研いで女性を追い求めては失敗する清太が、ここで催馬楽「山城」の瓜づくり、つまり三七一の御園生で瓜を作る清太に自然と結び付く。

御園生にさまざまな瓜がなっている情景には、拙稿で言及した『拾遺和歌集』の朝光の歌が重ね合わされよう。帰化人の女性の品評会に限定しなくても、一人の女性にひたむきに求婚する「山城」の瓜づくりと、あれこれと女性に目移りする好色者の二つの清太像が交錯するところが、この歌の面白さと言えるのではないだろうか。

次に、瓜科の蔬菜について考えたい。

三 苦瓜・阿古陀瓜・生瓢について

『梁塵秘抄』の注釈書には例外なく「苦瓜はツルレイシのこと」とある。しかし、この時代、他に用例を見ない。辞書や注釈書類は苦瓜の説明に、『書言字考節用集』と『大和本草』を用いている。苦瓜という語は、『梁塵秘抄』初出で、江戸時代まで用例がないのである。もともと南方由来のもので、近年こそゴーヤーの名で全国的に広まってきたが、九州以外では食用とされていなかった。平安時代に現代と同じ苦

瓜があったとは俄かに信じがたい。まして都近くの御園生で栽培されていたとは考えられない。造語ではなかるうか。甘瓜は真桑瓜の別名である。

王卿着「穩座」(中略)羞肴物「暑月削氷甘瓜等云々」

『江家次第』二〇

献上品や贈答品として好まれる甘瓜が美女の隠喩だとすれば、対置される「苦瓜」は全く違った女性像を連想させたことだろう。

一方、阿古陀瓜からはどのような女性が想像されたのだろうか。阿古陀瓜はカボチャに似るが果実は小さい。果皮は光沢のある赤色という。「阿古陀」で形を表していたようで、阿古陀香炉というものもある。女性の容姿の比喻に用いられているのは、管見では『狭衣物語』の女二の宮についてのみである。

御姿・様体、御髪のゆらくとこぼれかゝれるより始め、
額髪の、ただ少し短く見えたる御つらつき、あこだ瓜にかきたるやうなり。〈巻三〉

二の宮は、父帝に寵愛される気立ての良い女性として登場するが、髪の毛の美しさがとりわけ強調される。

(懐妊中) 御髪の久しう梳りなどもせさせ給はねど、まどへる筋なくゆらくとして、うちやられたる額髪の、

ことさらにひねりかけたらんやうに、こぼれかゝらせ給へるつらつきなど、さばかり、その人とも見えぬまで、瘦せそこなはれ給へるしも、いとゞ白う隈なき御色のあはひなど、今少しあてに心苦しう、薄物のお単衣も、重げに、あはれげなる御様を…〈巻二〉

「(髪)長さなどなべての事ぞかし。筋からの美しさ・つや・さがりなど、かくばかりなる類あらじかし」などて、「いみじうめでたし」と、(帝は)思ひ聞え給へり。〈巻二〉

阿古陀瓜に例えられる巻三の女二の宮は尼姿である。諸注は「円い顔であったのだから」とするが、他の部分に見える「あえか」「らうたげ」などの形容から、むしろ華奢な女性が想像される。本来特に丸顔ではないが、特長の、見事な髪が尼削ぎで短い額髪になったため、顔がふつくら見えたのである。悪い意味でないことは言うまでもない。

やや時代は下るが、『西行法師家集』に次の歌がある。

五二一

撫子のませに、うりのつるのはひかかりけるに、ちひさきうりじものなりたるをみて、人の歌よめと申せば撫子のませにぞはへるあこだうり同じつらなるなをしたひつつ

愛する子に例えられる撫子と取り合わせ、阿古陀瓜に「吾子」を掛けた。音の縁が大きいであろうが、詞書を文字通りに取れば、阿古陀瓜は小さくて、いとしい子どもを連想させる瓜であったと見ることもできる。

『大和本草』に、

京都に多し。南瓜に似て小なり。味不^レ好(後略)

とある。「味不^レ好」と言うものの、室町時代には阿古陀瓜が献上されたことが、『蔭涼軒日録』『お湯殿上日記』『殿申次記』の記事からわかる。平安時代の阿古陀瓜進上の記録は見出せないが、スイカが入ってくる以前、真桑瓜とは違った水つばさが、納涼の食物としての価値を持っていた可能性がある。

時代は遡り、『狭衣物語』成立とほぼ同時期に活躍したと思われる藤原顕綱の歌にも阿古陀瓜が詠み込まれたものがある。

三四

しりたる人の、とほき国へまかるとて、あこだうりを
おこせたりければ、うりにかきてかへしやる
みるからにつらさぞまさるあこだうりたちわかれゆくみ
ちとおもへば

『藤原顕綱集』

食味のあまり良くない阿古陀瓜を「しりたる人」が贈り、顕

綱が歌を書いて返しやったのはなぜだろうか。家集の当該歌のあたりは女性との贈答歌が多い。又、直前の歌の詞書に「三一 かたらふ人に五月五日つかはず」「三三 百和香にくららの花をくはふとてよめる」とあり、季節が折しも阿古陀瓜の実る頃であったと想像される。「しりたる人」は恐らく頭綱と恋愛関係にある女性だったのであろう。^(注)季節のものであり、いとしい人の意にも通じる「あこ」の名を持つ瓜を贈って、頭綱の反応を見たのではないだろうか。男は「つら」、「たち」という縁語を駆使し、別れの辛さを書き記して返したのである。

以上のことから『梁塵秘抄』三七一の阿古陀瓜は、「あこ」の音とその形状により、子どもっぽい、又は丸顔のかわいらしい女性であったと見なせるのである。

さて、生瓢^{なりひょう}は瓢箪^{ひょうたん}のことで同じくウリ科の植物である。「生」を冠するのは、加工して水汲みの道具として使われる杓^{ひょうたん}と区別するためと言われる。同種の夕顔の花が『源氏物語』で有名になり、歌語としても定着しているのに対し、ひさこは花も実も雅びなものと認識されなかった。

甘瓜や阿古陀瓜が実っている時期、ひさこはまだ花の季節である。しかし、もとより花の美しさを愛でたわけではない。たくさんの枝を伸ばして実をつけてほしいと呼びかけている

のである。瓜もそうだが、ひさこは中から思いがけないものが出てくる神秘的なものが見られていた。『宇治拾遺物語』の「雀報恩の事」などがすぐ思い浮かべられよう。これまでの瓜が女性の容姿・容貌に関わることであったのに対して、生瓢は女性の生殖機能に言い及んでいるのだろうか。

時代は下るが、室町時代物語『天稚彦草子』^(注)という絵巻に、「一夜ひさこ」なるものが出てくる。妻に海龍王であるという身分を明かし、一旦天に帰ることになった天稚彦が、「二三週間しても戻ってこなければ西の京の女に『一夜ひさこ』をもらってそれを昇って天に尋ねてきてくれ」と言い置く。

「一夜ひさこ」の実体は本文に書かれていないが、絵には、地面から生えた蔓に乗って天に向けて昇っていく女性が描かれる。蔓の先端部から煙のようなものが立ち上っている。更に伸び続けることを示しているのだろう。「ジャックと豆の木」の豆の木のようなもので、種を植えると一晩で天に届くことからの命名と思われる。この話の最後は七夕伝説の由来のような形になっているが、その前に天に昇る手段として出てくるのが「一夜ひさこ」である。三七一の「ちぢに枝させ」も、蔓が勢いよく伸びるエネルギーに重心が置かれ、男女の逢瀬から繁殖までの寓意だと考えるのは深読みに過ぎるだろうか。

これら瓜科の美や豊穣の女性から一転して、おかしみのある蕨茄子を最後に置いて落ちとして^(注10)いる。同時に、茄子という言葉の縁で三七二に続くのだろう。しかしそれだけなら、三六九と三七〇が、単に長刀と刈鎌という刃物の縁で配列されているのと同様であり、三連章と見なしにくくなる。三七二が山城茄子である点に注目したい。山城は茄子の産地としても名高いが、やはり催馬楽「山城」が念頭に浮かぶ。本稿二章で、三七〇の「こま」の音から催馬楽「山城」が連想され、三七一の御園生の瓜に繋がるといふ筋道をつけた。だが三七一に山城の地名そのものは出てこない。三七〇・三七一で水脈であった山城の地名が三七二で地表に出ること、この三首が、催馬楽「山城」の縁でまとまることがはつきりする。そしてこの三連章は、女性を求めてあちこちに行ったり、目移りしたりするばかりか、老女にまで手を出す好きがましい男の像を描き出しているのである。

おわりに

一三三六

百首歌たてまつりし時、嶺松

前太政大臣

きみがよは千千に枝させみねたかきはこやの山のまつ

ゆくすゑ

『続後撰和歌集』

三七一と同じ句を含む賀歌を挙げた。典型的な予祝歌である。ひきこに女性の生殖機能の意味を持たせているであろうことについては本文中で触れたが、ウリ科の野菜の列挙自体、本来、豊穣の予祝の歌であった可能性も考慮にいれなければならないであろう。真桑瓜は熟すと蒂が自然に蔓から離れるところから、蔓を臍帯と見なして「ほそおち」「ほそち」とも呼ばれた。実は子どもであることになるが、水分を含んでいることから子宮をも連想させ、神秘性を持つ。中に子ども(瓜子姫)や蛇が入っていたり、天の川が流れ出たり、といった類の説話や昔話に事欠かない。蛇や天の川と言えば、瓜と水との関係も検討に値する。又、小峯和明は瓜の靈性を踏まえながらも、瓜が「だまし、だまされる関係」の説話を生み出しやすい属性を持っていると指摘している^(注11)。今後、瓜を歌う今様や和歌と、説話の関係も視野に入れなければならないであろう。

以上のような課題を残しながらも、『梁塵秘抄』において、三七〇から三七二は催馬楽「山城」を軸に繋がっている三連章と結論付けることができた。三七一は、朝光の歌の影響も受けている。卑猥な比喻を持つ当代の芸の裏に、古典的な興趣が透かし見えるところが、この三連章の妙味なのである。

注

注1 渡邊昭吾『梁塵秘抄の風俗と文芸』三弥井書店 一九七九年
注2 『梁塵秘抄』の本文の引用は新編日本古典文学全集(小学館)による。

注3 「吾子が見たり」「吾子嘸みたり」「あかがみ(軼)たり」など諸説ある。植木朝子「茄子の歌——『梁塵秘抄』三七二番歌謡をめぐって——」(『梁塵』 研究と資料第十九号 二〇〇一年)に詳しい。

注4 『折口信夫全集ノート編』第十八巻 中央公論社 一九七二年

注5 『梁塵秘抄注釈』新典社 二〇〇一年

注6 注1

注7 『日本後記』延暦十五年九月二十一日条、弘仁三年正月二十五日条に栗駒山で狩が行われた記事があるということが、今井源衛『大和物語評釈』上(笠間書院 一九九九年)に紹介されている。

注8 「しり」は「あひしり」に比べ対象が同性の場合が多い。しかし和歌の詞書を調べると男女関係も少なくない。『頸綱集』にも次の例がある。

二二

しりたる人のもとより、ひさしくおとづれずとて、のきにおふる草をおこせたりければ、わすれぐさと思ひたるにやとて

これやおとにききつるわすれぐさまたこそしらね心ならひに

又、女性が親や主人に従って遠方に行くに際し、男が歌を贈ることもままあったようである。勅撰和歌集の離別・別の巻にも拾うことができる。

一三一六

あひしりて侍りける女の、人のくににまかりけるにつかはしける 公忠朝臣

いとせめてこひしきたびの唐衣ほどなくかへす人もあらなん

一三一七

返し 唐衣たつ日をよそにきく人はかへすばかりのほどもこひ女

じを 『後撰和歌集』一九 離別・羈旅

注9 『天稚彦草子』については、網野善彦・大西廣・佐竹昭広編『いまは昔 むかしは今第一巻 瓜と龍蛇』(福音館書店 一九八九年)で知った。

注10 聖性を付加される瓜に比して、茄子は滑稽なものと捉えられ文芸に現れることが少ない中で、今様の素材になっていることは注目すべきである、という趣旨のことを植木朝子が指摘している。(注3論文)

注11 『中世説話の世界を読む』岩波書店 一九九八年

(おおき ももこ・筑紫女学園大学非常勤講師)